



シーズテック（松山市）はポリ塩化ビフェニール（PCB）やダイオキシンなどの環境汚染物質の測定装置に強みを持つ。小型で価格を引き下げた新型機を2023年3月に発売する方針だ。水中のフッ素化合物や動物の病気を調べる用途などを新たに開拓する。

同社は07年に、愛媛大学発のスタートアップとして創業した。三浦工業と愛媛大学の共同研究の成果を元に、PCBの測定に役立つ2系統の装置を実用化した。

物質をイオンに変えて測る質量分析の前処理に使う装置を松山市の本社で開発し、抗原抗体反応を使う装置「フロー式バイオセンサ」の開発も進めている。

小型化で検査需要を開拓 ■ 動物の病気や環境調査に



シーズテックは抗原抗体反応を使うバイオセンサで新市場を開拓する（京都市の同社研究所）

「バイオセンサ」の開発を17年に設立した京都市の研究所で進めてきた。装置の製造は他社へ委託している。

PCBは濃度が一定以上になると産業廃棄物として扱えず、国の専門機関が処理する。処理費用が高額になるため、あらかじめ濃度を測って必要な分のみに対応する。この用途向けに、バイオセンサを各地の検査場などに約30台販売してきた。1台の価格は付属のパソコンがついて380万円（税抜き）だ。

バイオセンサの原理は、新型コロナウイルス感染症の流行でキットが普及したウイルスの抗原検査で使う「抗原抗体反応」と同じだ。PCBやダイオキシンなどの異物が動物の体に入ると、それが動物の体に入ると、その

「既存の2系統に続く第3の事業に育てる」と期待する。このほど試作機を開発した小型のバイオセンサだ。従来機より3分の1の大きさで、約10kgと軽い。価格も税抜きで100万円台前半に抑える見込みだ。

PCBなどの濃度を測る溶液を送り込むときに使うシリンジポンプという機器の代わりに、空気圧を使う素子を採用し、装置を小型化した。立石所長代理は「世界にも例が無い技術で、特許を出

れを取り除こうとする免疫反応が起きて抗体ができる。シーズテックはマウスに作らせた様々な抗体を使い、PCBなどの濃度を測る装置を作ってきた。

同社京都バイオ研究所の立石典生所長代理が「環境汚染を起す有機フッ素化合物の濃度測定にも使う計画だ。特に有機フッ素化合物は欧州で規制強化が進む可能性が高く、商機につなげたい考えだ。」

また、水中に溶け込み環境汚染を起す有機フッ素化合物の濃度測定にも使う計画だ。特に有機フッ素化合物は欧州で規制強化が進む可能性が高く、商機につなげたい考えだ。

海外展開に向けた環境も整いつつある。バイオセンサの濃度を測る国際規格が近くできあがる見込みで、有機フッ素化合物向けも含めてバイオセンサを売り込みやすくなる。環境問題への意識が高まるなか、海外での需要を掘り起す。

（草塩拓郎）

この小型装置で新たな市場開拓を進める。例えば、動物病院に導入すれば、イヌの血液中の成分で、体に炎症があると増える「CRP」というたんぱく質の濃度をその場で測れる。

《会社概要》

▽本社	松山市
▽事業概要	PCBなどの濃度測定機器の開発・販売
▽創業	2007年
▽従業員	25人
▽資本金	150万円